空が茜色に染まる。
今日がじきに終わる。
あたしは、一番高い木で沈みゆく日を見届ける。
今日も終わり、全ては過ぎ去り、永遠にこの手の中には戻ってこないのだ。
“黄昏泣き”か…。
赤ん坊が意味も無く泣くこの時間帯を言うのだと、あたしに鷲羽は教えた。
意味はあるのだ。
赤ん坊は知っているのだ、今日が二度と帰って来ない事を。本能として。
そう、まるで今のあたしみたいに。
失って行く日々。もうあの笑顔にも今日のあたしの感情にも二度とは戻れない。
そうして、あっという間にあたしは、あいつから離れなければならない時が来るのだろう。

「夕陽なんてなければ良いのになあ」
莫迦みたいな事を独り呟いて、あたしは木の上で膝を抱え俯く。
宇宙には、黄昏なんてなかった。
いや、知らなかったのだ、こんな感情。
「天地も赤ん坊の時には泣いたのかなあ」
あの頃に戻りたい。あの頃は、あたしは天地に触れる事も出来なかったけれど、その分、ずっと天地の成長を見つめることができた。
いつの間にあんなに大きくなったのだろう。まるで、一瞬だった。
今は、天地に触れられても、その心にまでは触れる事など出来ないのだと切なくなる。
あたしが近づいてもあいつは離れ、あいつが近づけば、あいつの全てを壊しそうなあたしは離れたくなる。
そうしているうちに、また陽が沈み、昇り、そして日々は流され、あたし達の想いなど嘲笑うかのように別れの日が来る。
赤ん坊の頃からずっと見て来たのに。誰よりもあたしが天地の事を分かっている筈なのに。
最初からずっとあたしにはあいつしかいないのに。
あいつがあたしの前から消えたら、あたしは…。
身体が震えるほど怖い事など、それだけだ。

顔を上げ、もう一度確認するように夕陽を見つめる。
変わらない。今日が終わる。
時間に執着しても意味がないのに。この想いを抱え込んでいても仕方がないと鷲羽が言っていた。いつかは終わる事。
あたしは溜め息を一つ吐いた。全く、あの皇女様が羨ましい。あいつなら、天地と一緒にずっと暮らして行っても、結婚しても平和に暮らしていけるのだろう。あたしみたいに、

一瞬を閉じ込めたいとなど思わず、天地だけを見て幸福に過ごすのだろう。
痛いほどに切なくなる事など、殆どないのだろう。
或いは、砂沙美や美星の様に、これからの暮らしに夢を抱けば良いのかもしれない。
夢なんて、あたしには無い。
天地が居る、今がすべてだ。
知らなければ良かった。天地に出会わなければ、この気持ちも孤独も知ることなどなかったのに。天地に出会った事が恨めしい。
本当に、独りになった時、あたしはどうすれば良いのだろう。
あたしの技術の全てを注ぎ込んで生んだ最高傑作なんだから、そんなにすぐには壊れないわよ、なんて、鷲羽は得意そうに言っていたけれど、・・じゃあ、あたしは天地が居なくても此処に生きなきゃいけないってことだろう。そんなのには耐えられない。
あたしはそんなに強くない。

「おーい」
何処かで声がする。天地だ。あたしの心が弾む。
きっと、遠く宇宙の隅と隅に離れてしまっても、天地の声なら聞こえる気がする。
少し浮遊し、木々の下に目をやると、ウロウロと歩く天地の姿が見えた。
「天地ッ！」
「うおっ」
後ろから抱きついてやると、天地は反動で反りかえり、驚いた。
「危ないだろう、」
「ごめんごめん」
悪いなどと、ちっとも思っていないが謝り、あたしは天地の顔を見つめる。
「夕飯の時間だぞ。砂沙美ちゃんが待ちくたびれてるよ」
ブツブツと文句を言いながら歩き出す天地の背を見つめながら、また夜が来るんだなとあたしは当り前の事を思った。
「魎呼？」
あたしがいつまで経っても付いてこないので、天地が振り返りあたしの名を呼ぶ。
あたしの名前。あたしの権利。名前を呼んで貰うのが一番好きだと天地に言ったらどんな顔をするだろう。天地の声は柔らかく、名前を呼ぶのが上手い。
「どうした？」
「ふふ、なんでもねぇよ」
並んで歩きながら、あたし達は家路を辿る。幾つもの日々をこうして過ごして来たなと思いながら。
その時、隣に居た天地が目を細めて空を見上げた。
「夕陽が眩しいなあ。明日も晴れるな…」

明日。その言葉にあたしははっとする。
明日も天地と居られるのだ。続いて行く明日。
今日は過ぎ去っても、また明日も天地と居られるのなら。最期にあたしが還る場所が天地なら。
怖いものは全て浄化される。
「明日って良い言葉だな」
あたしが素直にそう言うと、天地は驚いた顔をあたしに向けた。
「どうしたんだよ」
「何だよ、あたしが言ったら変か？」
「変だよ。魎呼に似合わない…」
「ひっでーなお前は」
言って、じゃれるみたいに天地の首に腕を回し引き寄せる。
「痛い、痛いよ」
「じゃあ、罰として、腕を組むこと」
「なんの罰だよ」
そう言いながら、天地が拒否しない事をあたしは分かっていた。
大好きな温もり。あたしの希望。
「お腹空いたなあ」
天地は空を見上げて言った。
あたしの隣で。あたしと一緒に。

幸福は一瞬で、あたしは明日も黄昏にきっと涙するだろう。
でも良いのだ、きっと。
その一瞬を愛せと鷲羽がいつか言ってた気もする。
…たく、あいつは本当にあたしの心をよく覗いてるぜ。

柔らかい風があたしと天地の頬を撫で、過ぎ去った。